新日鉄八幡製鉄所病院歯科口腔外科の過去13年間に おける入院患者の臨床統計的観察

新日鉄八幡製鉄所病院歯科口腔外科 (科長: 児玉高盛)

児 玉 高 盛・瀬 尾 義一郎

昭和55年6月3日受付

Clinical and Statistical Observations for thirteen years on Inpatients at
Department of Oral Surgery, Shinnittetsu Yawata Seitetsusho Hospital

Takamori Kodama and Giichiro Seo

Clinic of Dentistry and Oral Surgery, Sinnittetsu Yawata
Seitetsusho Hospital (Chief: Dr. Takamori Kodama)

In this paper clinical and statistical observations on inpatients during thirteen years from January, 1967 to December, 1979, are briefly reported, with the following conclusions:

- 1) Four hundred and four patients were hospitalized, 231 of whom (57.18%) were male.
- 2) Frequencies of main disease were as follow:
inflammation 178 cases (44.06%), injury 69 cases (17.08%), cystic disease 65 cases (16.09%), other diseases 43 cases (10.64%), tumor 29 cases (7.1%), congenital malformation 20 cases (4.95%).

緒 言

当病院の歴史は古く、明治34年に八幡製鉄所の創業と同時に付属病院が設立され、歯科は昭和9年から開設されている。以来、社員、家族の診療と健康管理の一端に携さわってきたが、昭和49年4月から事業所病院として地域医療参加の役割を担うことになり、歯科も口腔外科を標榜している。診療科の特徴は、外来診療が主体ではあるが、地域社会のニーズに応ずべく口腔外科を中心とした診療体系を展開していることである。したがって、各医療機関からの紹介患者や受診してくる患者には、入院加療を要する口腔外科的症例が最近急速に増加の傾向をたどっている。

そこで、過去13年間における当院口腔外科入院患者の動態ならびに傾向を観察することは、今後の総合病院歯科口腔外科のあり方に対する指針と理解をうるに必要な資料と考え、統計的観察を行なったのでその結果を報告する。

資 料

昭和42年(1967)1月より昭和54年(1979)12月までの13年間に、新日鉄八幡製鉄所病院歯科口腔外科で入院加療を行なった患者総数 404名を対象とし、以下のよう
な各項目別に分けて調査した。

- I. 年度別および疾患別頻度
- II. 地区別分布

Ⅲ. 受診経路

Ⅳ. 疾患別観察

Ⅴ. 各疾患の年齢別ならびに性別頻度

調 査 成 績

Ⅰ. 年度別ならびに疾患別頻度

入院患者 404名の年度別頻度は表1に示した。すなわち1973年度の18名が最低で、1979年度の60名が最高となっていた。また年間平均は31名であった。

疾患別頻度では炎症・178例(44.06%)が最も多く、ついで外傷・69例(17.08%)、嚢胞・65例(16.09%)、その他・43例(10.64%)、腫瘍・29例(7.18%)、奇形・20例(4.95%)の順となっていた。

Ⅱ. 地区別分布

入院患者を地区別にみると表2に示すとおりである。

表2 地区別分布

地区名	性別	炎症	外傷	嚢胞	腫瘍	奇形	その他	計 (%)
八幡東区	男	34	22	14	7	5	11	93
	女	27	5	14	4	6	11	67
八幡西区	男	25	13	5	4	1	9	57
	女	30	2	11	5	5	2	55
小 計		116	42	44	20	17	33	272 (67.33)
小倉北区	男	6	4	1	0	1	1	13
	女	5	1	2	0	0	2	10
小倉南区	男	1	1	0	0	0	0	2
	女	0	0	0	1	0	0	1
戸畑区	男	13	5	2	3	0	1	24
	女	6	1	0	3	0	2	12
若松区	男	1	0	0	0	0	0	1
	女	2	0	1	0	0	0	3
門司区	男	0	1	1	0	0	0	2
	女	0	0	0	0	0	0	0
小 計		34	13	7	7	1	6	68 (16.83)
市 外	男	11	10	5	0	0	3	29
	女	8	2	4	2	0	1	17
県 外	男	7	1	1	0	1	0	10
	女	2	1	4	0	1	0	8
小 計		28	14	14	2	2	4	64 (15.84)
総 計		178	69	65	29	20	43	404 (100.00)

表1 年度別頻度

疾患 年度	炎症	外傷	嚢胞	腫瘍	奇形	その他	計 (%)
1967	36	7	2	3	5	6	59 (14.60)
1968	3	7	5	1	4	3	23 (5.69)
1969	15	2	1	0	1	11	30 (7.43)
1970	11	6	1	4	2	4	28 (6.93)
1971	6	5	4	1	1	4	21 (5.20)
1972	9	8	7	1	2	1	28 (6.93)
1973	7	6	3	0	2	0	18 (4.46)
1974	12	6	5	1	1	2	27 (6.68)
1975	7	1	7	3	1	1	20 (4.95)
1976	9	2	5	2	1	2	21 (5.20)
1977	16	6	11	2	0	3	38 (9.41)
1978	14	7	5	2	0	3	31 (7.67)
1979	33	6	9	9	0	3	60 (14.85)
計 (%)	178 44.06	69 17.08	65 16.09	29 7.18	20 4.95	43 10.64	404 (100.00)

患者小計からみれば、北九州市のうち八幡東、西地区が272名(67.33%)で過半数以上を占めており、ついで戸畑、小倉、若松、門司地区の68名(16.83%)の順となり、市、県外は64名(15.84%)であった。

表3 受診経路

科名	性別	炎症	外傷	嚢胞	腫瘍	奇形	その他	計 (%)
当 科	男	56	28	14	7	4	16	125 (53.22)
	女	45	4	19	4	5	13	90
歯 科 開 業 医	男	31	12	10	6	0	4	63 (27.72)
	女	27	1	12	6	2	1	49
外 科	男	4	9	1	0	0	2	16 (5.94)
	女	0	4	0	3	0	1	8
整形外科	男	1	6	0	0	0	1	8 (2.47)
	女	0	2	0	0	0	0	2
内 科	男	2	0	1	0	0	1	4 (2.23)
	女	0	0	2	1	0	2	5
耳 鼻 科	男	4	2	2	0	0	1	9 (4.21)
	女	6	0	1	0	0	1	8
小 児 科	男	0	0	0	0	4	0	4 (2.23)
	女	0	0	0	0	5	0	5
大 学 (口腔外科)	男	0	0	1	1	0	0	2 (1.98)
	女	2	1	2	1	0	0	6
計		178	69	65	29	20	43	404 (100.00)

Ⅲ. 受診経路

入院患者の紹介経路を疾患別に示すと表3のとおりである。科目別はで直接当科を受診した215名(53.22%)を除けば、歯科開業医よりの112名(27.72%)が最も多く、ついで外科・24名(5.94%)、耳鼻科・17名(4.21%)の順で、その他整形外科10名、内科、小児科の9名、大学(口腔外科)の8名となっていた。炎症については、歯科開業医からの58名が群を抜いており、外傷については、外科および歯科開業医からの13名がこれに次ぎ、嚢胞は歯科開業医の22名、腫瘍は歯科開業医の12名であった。また、性別についてみると歯科開業医、外科、整形外科よりの紹介は男性に多く、他の科ではとくに差を認めなかった。

表4 炎症

病名	性別	男	女	計(%)
骨膜炎		21	17	38(21.35)
膿瘍		19	12	31(17.42)
歯性上顎洞炎		13	16	29(16.29)
智歯周囲炎		10	15	25(14.04)
蜂窩織炎		8	8	16(9.00)
口内炎		8	5	13(7.30)
骨髄炎		7	2	9(5.06)
放線菌症		4	1	5(2.81)
リンパ節炎		4	0	4(2.25)
外歯瘻		2	0	2(1.12)
耳下腺炎		1	1	2(1.12)
歯肉増殖症		1	1	2(1.12)
肥大性歯肉炎		0	2	2(1.12)
計		98	80	178(100.00)

Ⅳ. 疾患別観察

A. 炎症(178例)

炎症性疾患は178例で詳細は表4に示した。すなわち急性炎症がほとんどであり、なかには特殊性炎症として放線菌症・5例が含まれていた。また歯性上顎洞炎・29例では10例が耳鼻科よりの紹介であった。性別では、さほどの差異は認められなかったが、放線菌症、リンパ節炎では男性が多くなっていた。

B. 外傷(69例)

顎・顔面の外傷では顎骨々折と、軟部損傷をともなう合併例が大多数であったが、軟部損傷は除外して調査した。結果は表5に示したとおりで、このうち下顎骨々折が38例(55.07%)で過半数以上を占め、ついで歯槽突起骨折・20例(28.98%)となっていた。また、直接外

表5 外傷

病名	性別	男	女	計(%)
上下顎骨々折		0	1	1(1.45)
上顎骨々折		1	0	1(1.45)
下顎骨々折		35	3	38(55.07)
歯槽突起骨折		16	4	20(28.98)
頰骨弓骨折		3	0	3(4.35)
脱臼		0	4	4(5.80)
口唇挫傷		2	0	2(2.90)
計		57(82.61)	12(17.39)	69(100.00)

傷によるものとして脱臼・4例および口唇挫傷・2例があった。次に性別では男性57例(82.61%)、女性12例(17.39%)と圧倒的に男性が多かった。

次に、外傷のうち最も頻度の高い下顎骨々折38例については、1線、2線、3線、粉碎骨折などの症例が多岐にわたっているため、骨折線の数から骨折部位の発現頻度をみると表6に示すとおり、骨折線の総数は79本におよんでいた。これを部位別にみると臼歯部・28本(35.44%)が最も多く、ついで前歯部・21本(26.58%)、下顎角部・10本(12.66%)、下顎頸部・12本(15.19%)、下顎枝部・8本(10.13%)の順であった。

表6 下顎骨々折の部位と骨折線数(症例数38)

部位	骨折線数(本)	(%)
前歯部	21	(26.58)
臼歯部	28	(35.44)
下顎角部	10	(12.66)
下顎頸部	12	(15.19)
下顎枝部	8	(10.13)
計	79	(100.00)

表7 外傷の原因別

原因	性別	男	女	計(%)
交通事故		22	8	30(43.48)
労災		25	0	25(36.23)
スポーツ		5	0	5(7.25)
その他	転落	1	4	5(7.25)
	打撲	3	0	3(4.34)
	転倒	1	0	1(1.45)
計		57	12	69(100.00)

次に、受傷を原因別に調査してみると表7に示すとおりである。すなわち、交通事故が30例（43.48%）で最も多く、ついで労災事故・25例（36.23%）となり、スポーツ・5例（7.25%）、その他・9例（13.04%）で、労災事故の多いのが産業病院の特色とも思われた。

表8 外傷の年齢・性別

年齢(才)	性別	男	女	計 (%)
10 才 未 満		2	2	4 (5.80)
10 才 代		12	2	14 (20.29)
20 才 代		16	3	19 (27.54)
30 才 代		11	0	11 (15.94)
40 才 代		11	2	13 (18.84)
50 才 代		5	1	6 (8.69)
60 才 以 上		0	2	2 (2.90)
計 (%)		57 (82.61)	12 (17.39)	69 (100.00)

次に年齢および性別をみると、表8に示すように20才代・19例（27.54%）が多く、ついで10才代・14例（20.29%）であった。性別では男性57例（82.61%）が女性12例（17.39%）に比して圧倒的に多かった。とくに交通事故・30例では10才代、20才代の若年者が約半数近くを占めており、現代の世相を反映しているように思われた。

C. 腫瘍（29例）

腫瘍については良性と悪性に分けて調査した。

表9 良 性 腫 瘍

病 名	性別	男	女	計 (%)
歯 腫 原 性 腫	エナメル上皮腫	0	3	3 (15.79)
	歯 牙 腫	1	0	1 (5.26)
非 歯 原 性 腫 瘍	多 形 性 腺 腫	3	4	7 (36.85)
	線 維 腫	1	3	4 (21.06)
	血 管 腫	0	1	1 (5.26)
	軟 骨 腫	0	1	1 (5.26)
	歯 肉 腫	0	1	1 (5.26)
	乳 頭 腫	0	1	1 (5.26)
計 (%)		5 (26.32)	14 (73.68)	19 (100.00)

1. 良性腫瘍（19例）

良性腫瘍19例を歯源性腫瘍と非歯源性腫瘍とに分けると表9のごとくで、非歯源性腫瘍が15例（78.95%）、歯源性腫瘍が4例（21.05%）であった。なおエナメル上

腫皮3例は、いずれも女性で下顎骨切除および腸骨移植術を行なった症例である。性別では女性14例（73.68%）、男性5例（26.32%）で女性が多かった。

表10 悪 性 腫 瘍

病 名	性別	男	女	計 (%)
上 顎 癌		3	0	3 (30.00)
下 顎 癌		2	0	2 (20.00)
舌 癌		2	0	2 (20.00)
口 唇 癌		1	0	1 (10.00)
白 板 症		1	1	2 (20.00)
計 (%)		9 (90.00)	1 (10.00)	10 (100.00)

2. 悪性腫瘍（10例）

悪性腫瘍は表10に示すとおりに、癌腫・8例、白板症・2例である。この白板症については悪性腫瘍群に入れるか否かの判断は困難であるが、一応前癌病変として取上げた。性別では、男性9例（90%）で大多数を占めていたのが特徴的であった。

表11 囊 胞

病 名	性別	男	女	計 (%)
歯 原 性 性	歯 根 囊 胞	10	19	29 (44.62)
	濾胞性歯嚢胞	12	9	21 (32.31)
	原始性嚢胞	1	1	2 (3.08)
非 歯 原 性 性	術 後 性 嚢 胞	3	1	4 (6.15)
	ガ マ 腫	0	3	3 (4.61)
	鼻 口 蓋 嚢 胞	1	2	3 (4.61)
	正 中 上 顎 嚢 胞	1	1	2 (3.08)
	粘 液 嚢 胞	1	0	1 (1.54)
計 (%)		29 (44.62)	36 (55.38)	65 (100.00)

D. 嚢胞（65例）

嚢胞を歯源性和非歯源性に分けてみると表11のとおりで、歯源性的の52例（80%）は高い頻度であり、非歯源性的は13例（20%）にすぎなかった。嚢胞中原始性嚢胞の1例（男性）は、下顎骨切除後腸骨移植手術を行なった症例である。性別では女性が男性に比してやや多くなっていた。

E. 奇形（20例）

表12に示すように口唇裂・11例（55%）、口蓋裂・7例（35%）、唇顎口蓋裂・2例（10%）の20例であった。このうち二次的に修正手術を行なったのは5例であっ

表12 奇 形

病 名	性 別		計 (%)
	男	女	
口 唇 裂	3	8	11 (55.00)
口 蓋 裂	3	4	7 (35.00)
唇 顎 口 蓋 裂	2	0	2 (10.00)
計	8	12	20 (100.00)

た。性別では女性が男性よりやや多くなっていた。なお昭和52年度(1977)からは当院では形成外科が開設され、以後もっぱら裂奇形は依頼しているのが現状である。

表13 そ の 他

病 名	性 別		計 (%)
	男	女	
歯 槽 堤 吸 収	8	9	17 (39.53)
三 叉 神 経 痛	8	4	12 (27.91)
血 液 疾 患	3	3	6 (13.95)
顔 面 神 経 麻 痺	2	1	3 (6.98)
唾 石 症	2	1	3 (6.98)
重度心身障害者	2	0	2 (4.65)
計	25	18	43 (100.00)

F. その他(43例)

その他については前述の各項目に概当しない症例である。表13に示すとおり、歯槽堤吸収の17例(39.53%)が最も多く、三叉神経痛・12例(27.91%)がこれに付いている。血液疾患6例のうち2例(男性1, 女性1)は、抜歯後出血のため発見された急性白血病で、いずれも死の転帰をとった症例であった。

V. 各疾患の年齢別ならびに性別頻度について

各疾患の年齢別ならびに性別頻度は図1のごとくである。年齢別頻度については、10才未満・38名(9.41%)、10才代・46名(11.39%)、20才代・63名(15.59%)、30才代・67名(16.59%)、40才代・88名(21.78%)、50才代・59名(14.60%)、60才以上・43名(10.64%)であって、各年代に広く分布している。また、20才代以下の若年層よりも30才代以後50才代までの壮年層が214名(68.69%)で過半数を占めていた。

性別頻度では男性231名(57.18%)に対し、女性173名(42.82%)で、男性の方が58名(33.53%)多かった。

疾患別からみた特徴は、外傷において男性が圧倒的に多く、しかも20才代であったことである。また、奇形では当然のことながら10才未満の乳幼児に集中してみられた。

図1 各疾患の年齢別並びに性別頻度

表14 各施設における疾患別頻度の比較

	新日鉄八幡製鉄所病院 歯科口腔外科	福岡大学病院 歯科口腔外科	岩手医科大学 歯学部口腔外科	大阪労災病院 口腔外科
	(%)	(%)	(%)	(%)
1	炎症 44.06	炎症 35.9	炎症 22.9	奇形 61.27
2	外傷 17.08	外傷 19.9	奇形 20.7	外傷 13.69
3	嚢胞 16.09	奇形 9.6	腫瘍 16.6	炎症 9.87
4	腫瘍 7.18	嚢胞 8.3	嚢胞 15.7	腫瘍 7.16
5	奇形 4.95	全身疾患治療 8.3	外傷 13.1	嚢胞 4.10
6	その他 10.64	腫瘍 7.1	その他 11.0	その他 3.91
7		心身症 4.5		
8		その他 6.4		

考 察

新日鉄八幡製鉄所病院歯科口腔外科での過去13年間にわたる入院患者の臨床統計的観察を行なった。入院患者の総数は404名で、年間平均31名であった。しかしながら昭和54年（1979）より急速に増加がみられたことは、口腔外科を主体とした当科での特徴的な診療による影響が現われてきたものと思われる。

疾患別については、炎症・44.06%で最も多く、ついで外傷・17.08%、嚢胞・16.09%、腫瘍・7.18%、奇形・4.95%、その他・10.64%であった。これを藤岡ら（1971）¹⁾、本田ら（1974）²⁾および山口ら（1977）³⁾などの報告と比較してみると表14のごとくである。それぞれに特異性があるが、都市および地域差、またはその病院口腔外科の特徴がうかがわれており興味深いことである。

地区別分布については、合計で地元八幡地区（東、西）が最も多く、炎症疾患群でも他の疾患群に比較して八幡地区（東、西）が圧倒的に多くなっていた。

受診経路については、歯科開業医が多く、大学（口腔外科）からの8名は、いずれも全身疾患との合併症で、総合病院歯科口腔外科とのコミュニケーションが円滑に遂行されたもので、今後各科とのチームワークアプローチの必要性を示唆しているものと思われる。

疾患別観察による炎症については、いずれも急性炎症で全身的疾患との関連性を持つ症例が多くみられた。外傷については、下顎骨骨折・38例（55.07%）が最も多く、骨折線の数からみた骨折部位の頻度は臼歯部に多発していた。

原因別では、交通事故・30名（43.48%）が多く、年齢も若年層が約半数近くを占め、しかも男性が圧倒的に多かった。また労災・25名（36.23%）も主として打撲、

転落によるものが多く、全てが男性であった。

腫瘍については、良性は19例であったが、歯原性の良性腫瘍4例のうち3例は、いずれも下顎骨エナメル上皮腫で腸骨移植術を行なった。またこの中には、2歯を包含し臨床上濾胞性嚢胞を疑ったエナメル上皮腫の1例⁴⁾も含まれている。悪性は10例で、このうち8例は全て癌腫であり、いずれも抗癌剤、⁶⁰Coならびに手術を併用した症例であった。このうち上顎癌2例と下顎癌1例は、残念ながら2年後に死の転帰をとった。また、白板症の2例は舌縁にみられたもので、その予後については不明である。

嚢胞については、65例のうち歯原性52例（80%）で、主として歯根嚢胞29名（44.61%）と濾胞性嚢胞21名（32.31%）であった。また、一応原因不明として歯原性に入れた原始性嚢胞の1例⁵⁾は、下顎骨に発現したもので顎骨切除後に腸骨移植手術を併用した。

奇形については、20例とも裂奇形で、このうち二次的修正手術を行なった5例は、いずれも唇裂であった。また、昭和52年度（1977）からは形成外科に依存はしているが、矯正、小児歯科、補綴を加えたチームアプローチを実施し成果をあげている。

その他については、43例のうち特殊な症例として急性白血病の2例がある。これらは当科において発見し、内科との総合的な治療を行なったが、死の転帰をとった症例であった。

年齢別ならびに性別頻度については、まづ年齢別にみると40才代が21.78%で最も多く、ついで30才代16.59%、20才代15.59%、50才代14.60%、10才代11.39%、60才代以上10.64%、10才未満9.41%の順となっていた。性別では男性57.18%、女性42.82%で男性がやや多かった。

なお、その他外来における手術の内容も、口腔外科的

に程度の高い症例が多く、これらを歯科医師7名、応援医師1名で行なっているが、今回はその資料を割愛した。

以上の資料が示すごとく、当総合病院は地域医療の中核的使命を遂行しており、その中における 歯科のあり方、特に口腔外科の果たす役割は極めて重要な意義があり、今後もその必要性は増々高まるものと思われた。

結 論

昭和42年（1967）1月より昭和54年（1979）12月まで

の13年間入院加療を要した患者404名について、動態ならびに傾向を観察した。疾患別では炎症・178例（44.06%）が最も頻度が高く、ついで外傷・69例（17.08%）、嚢胞・65例（16.09%）、その他・43例（10.64%）、腫瘍・29例（7.18%）、奇形・20例（4.95%）の順であった。

稿を終えるに臨み、終始御指導、御校閲を賜った九州歯科大学口腔外科第2講座梶山 稔教授に深謝致します。

引 用 文 献

- 1) 藤岡幸雄・大橋 靖・他：岩手医科大学歯学部口腔外科創設後5年間における入院患者の臨床統計的観察，口科誌 20：592—600，1971.
- 2) 本田光徳・須川 亮・他：大阪労災病院口腔外科開設後10年間における入院患者の臨床統計的観察，日口外誌 20：347—353，1974.
- 3) 山口修平・都 温彦：福岡大学病院歯科口腔外科開設後3年3カ月間における入院患者の統計的観察，福大医紀 4：301—306，1977.
- 4) 児玉高盛・瀬尾義一郎・他：2歯を包含し臨床的に濾胞性嚢胞を疑ったエナメル上皮腫の一症例，日口外誌 26：784—789，1980.
- 5) 児玉高盛・瀬尾義一郎・他：下顎骨に発現した原始性嚢胞の1症例，日口外誌 26：157—163，1980.